

太平記小論

杉本, 圭三郎

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

23

(開始ページ / Start Page)

70

(終了ページ / End Page)

81

(発行年 / Year)

1980-02-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019268>

太平記小論

杉本圭三郎

建武年間における太平記

半世紀に及ぶ治乱興亡の歴史を叙述した太平記の世界において、建武とよばれる年号の一時期が、どのような位置をしめているか、また、その時代の追求がどのような視点からなされているかを検討するのが本稿の課題である。

元弘三年五月、鎌倉幕府は崩壊し、太平記の最初のモチーフであるところの公武の抗争は一段落をつけ、公家一統の政権の実現をみることになった。太平記では卷一から卷十二の冒頭までの叙述がこの歴史過程を表現しており、いわゆる第一部の世界を成しているところだが、成就の時点が新たな矛盾を孕み、忽ちそれが表面化して、新政権も瓦解し、ふたたび戦乱の時代をむかえることになる。太平記に云う建武の乱の要因が、北条氏滅亡の時点で既に胚胎していたのである。そしてこの乱の経緯が太平記第二部の世界の主要な

内容となる。

太平記卷十二は

先帝重祚之後、正慶ノ年号ハ廢帝ノ改元ナレバトテ被レ棄レ之、本ノ元弘ニ歸サル

という記述からはじまっている。元弘二年三月、後醍醐天皇隠岐遷幸の後、北条氏によって光厳天皇が擁立され、正慶と改元されたが北条氏の滅亡とともに後醍醐天皇が皇位に復されふたたび元弘に改められた。翌四年一月二十九日、建武と改元されるのであるが、太平記は

元弘三年七月ニ改元有テ建武ニ被レ移。是ハ後漢光武、治ニ王莽之乱ニ再統漢世ニ佳例也トテ、漢朝ノ年号ヲ被レ摸ケルトカヤ(卷十二)

と記している。毛利家本天正本は四年正月とあって、史実に一致しているが、流布本の場合屢年月日の記述に誤りがあることは、太平

記全般において年代記的性格が稀薄であることとともに注意すべき問題である。が、当面の課題からはずれるので、機会を改めて検討することにした。

建武は、このうち三年二月二十九日、延元と改元される。太平記卷十五に

天下ノ吉凶必シモ是ニハヨラヌ事ナレドモ今ノ建武ノ年号ハ公家ノ為不吉也ケリトテ二月二十五日ニ改元有テ延元ニ被レ移

とあり、天正本が三月二日とするのとともに他の史料と相違がある。建武年間狭義にとればこの二年有余の期間となるが、足利尊氏の擁立する光明天皇、即ち北朝側では、ひきつづき建武の年号がもちいられ、その五年、八月二十八日に暦応と改元される。この改元については太平記はふれていない。しかし、卷十九において

建武三年六月十日 光厳院太上天皇重祚ノ御位ニ即進セタリシガとある記事につづいて

同年十月三日改元有テ、延元ニウツル
としている。これは、つづく記事が

其十一月五日ノ除目ニ足利宰相尊氏ノ卿(中略)征夷將軍ノ武將ニ
備り給フ

とあるのを古典大系本の注に「北朝が尊氏を將軍に任じたのは建武五年(暦応元年)」と指摘しているところから逆にこの改元の記述を暦応の誤りとみ、例によって年月日の誤謬を犯しているものとする
ことができよう。

暦応改元が建武五年八月二十八日であり、新田義貞の藤島における戦死はこの年閏七月二日とされているから、建武年間はこの義貞の死をふくめた約五年にわたる期間とすることができる。そしてこれは太平記第二部の世界の主要な事件の殆んどがふくまれる期間である。そこで、まずこの期間の状況の推移を展望しておきたい。

太平記卷九において、六波羅の没落、卷十で元弘三年五月二十二日の鎌倉の壊滅、卷十一で九州の平定を叙述し

六十余州悉符ヲ合タル如ク、同時ニ軍起テ繼ニ四十三日ノ中ニ皆滅ビヌル業報ノ程コソ不思議ナレ

と総括して、卷十二に公家一統の政権の成立が述べられる。ところが、護良親王はなお「被レ召諸国兵(中略)合戦ノ御用意アリ」との風聞がたち、後醍醐天皇の糾問に対する答のなかで「足利治部大輔高氏僅ニ以ニ一戦功、欲レ立ニ其志於萬人之上。今若乘ニ其勢微ニ不レ討レ之、取ニ高時法師逆惡ニ加ニ高氏威勢上ニ者ナルベシ」と対決の意志を明らかにして、新たな抗争の発端が示されるのである。一方、新政権の施政は、まず戦後処理の第一課題ともいふべき論功行賞において破綻し、收拾のつかぬ混乱ぶりを露呈することになる。公家貴族に対する厚遇は

「今ノ如ニテ公家一統ノ天下ナラバ、諸国ノ地頭・御家人ハ皆奴婢・雑人ノ如ニテ有ベシ。哀何ナル不思議モ出来テ、武家執ニ四海権ニ世中ニ又成カシト思フ人ノミ多カリケリ」

という武士層の憤懣をよび、治世においても、

「或ハ自ニ内奏ニ訴人蒙ニ勅許ニ決断所ニテ論人ニ理ヲ被レ付、又決断所ニテ本主給ニ安堵、内奏ヨリ其地ヲ別人ノ恩賞ニ被レ行。如レ此互ニ錯乱セシ間、所領一所ニ四五人ノ給主付テ国々ノ動乱更ニ無ニ休時。」

という紛糾ぶりで、作者は「是尚理世安国ノ政ニ非リケリ」と慨嘆するのである。

建武と改元される元弘四年正月には内裏造營がはかられ、「日本国ノ地頭・御家人ノ所領ノ得分二十分一ヲ被ニ懸召」ることになるがこれも「神慮ニモ違ヒ驕誇ノ端トモ成ヌト、擧レ眉智臣モ多カリケリ」と批判される。さらに後醍醐天皇側近の奢侈をきわめる頼麿ぶりが叙述され、新政権の道義上の挫折が強調されている。卷十二はこうして、新政権の成立が直ちにその崩壊へとすすむ矛盾を内包していたことを明らかにしていくのであるが、最後に、護良親王と尊氏の対立をふたたび叙述し、天皇は、護良親王を足利方に引き渡すことになる。

抑今兵革一時ニ定テ、廢帝重祚ヲ踐セ給フ御事、偏ニ此宮ノ依ニ武功ニ事ナレバ、縦雖レ有ニ小過、誠而可レ被レ宥カリシヲ、無ニ是非ニ被レ渡ニ敵人手ニ被レ處ニ遠流ニ事ハ、朝廷再傾テ武家又可レ淫瑞相ニヤト、人々申合ケルガ、果シテ大塔宮被レ失サセ給シ後、忽ニ天下皆將軍ノ代ト成テケリ

卷十二はこの記述で終わっている。護良親王はこののち卷十三で、建武二年七月（太平記卷十では「建武元年ノ春ノ比、暫閑東を劫略シテ、天

下ノ大軍ヲ起シ」と記され、卷十三では「時行弥大勢ニ成テ、既ニ三方ヨリ鎌倉へ押寄ルト告ケレバ、直義朝臣ハ（中略）將軍ノ宮ヲ具足シ奉テ、七月十六日ノ暁ニ、鎌倉ヲ落給ケリ」と書かれ、建武何年のことかは明確にされていない）の北条時行の挙兵（いわゆる中前代の乱）の際、足利直義によって殺害され、新政下の最初の対立に終止符がうたれる。田中義成「南北朝時代史」によれば、護良親王の軍略は卓抜であり、「宮が令旨を下されたる方面は頗る広汎にして殆ど全国に互れり、之を要するに近畿方面の兵を以て六波羅に向はしめ、四国方面の兵を以て長門探題府に向はしめ、九州方面の諸豪を以て九州探題府に向はしめられしなり、翌元弘三年に至りて、これ等各方面の官方が、一時に兵を挙げて京都回復の功を奏せるは、実に宮の御計画が基礎となれるなり」と述べている。「六十余州悉符ヲ合タル妙ク、同時ニ軍起」った背後には、この史家の指摘する政略があったわけである。さらに鎌倉攻略の場合も「各方面の諸軍が時を違へず鎌倉を包囲せるは必ず統一的大命令の存せし事を認めざるべからず、吾人は之を以て大塔宮御畫策に出づと信ず」と推測されているが正鵠を射た見解とみることができよう。太平記は大塔宮護良親王の活躍を第一部で描いているがこの「統一的大命令」が、鎌倉幕府を攻撃する軍勢を組織していくプロセス、といった、おもてに現れない諸事実を追求し叙述することはできなかった。幕府討伐における護良親王の役割は極めて大きかったが、「然るに足利尊氏なる者あり、突然横合より出現し来りて其功を奪ふに至りぬ、他日宮と尊氏と、両立

せざる形勢となりしは全く此に原因するなり」と南北朝時代史がとらえるように、討幕後の覇権をめぐる争いがまず護良親王と足利尊氏（直義）の間の葛藤として展開したのである。

梅松論の方ではこの間の状況を

叡念ヲ以テ関東亡ス事ハ、武家ヲ被レ立シカ為也然ニ直義朝臣大守トシテ鎌倉ニ居住ノ間東国ノ輩是ニ帰シテ万人アヘテ京都ニ帰伏セズ併一統ノ御本意今於テサラニ其益ナシ云々 武家ハ又公家ニウラミヲフクム輩、頼朝ノ卿ノゴトク天下ヲ自専アラン事如何ニモイソガシク思ヘリ 此故武家公家水火ノアラソヒニテ元弘三年モクレニケリ

と叙述し、首脳部の抗争のみならず、階級としての対立としてとらえている。

太平記卷十三は、朝廷の失政を諫言していられず、ついに出家し遁世する萬里小路藤房の行動、高時の弟北条時興にくみして謀反を企てたがにより誅伐された西園寺公宗の運命、北条時行の挙兵と、この討伐に向った尊氏の行動が叙述され、

サテコソ、尊氏卿ノ威勢自然ニ重ク成テ、武運忽ニ開ケ、レバ、天下又武家ノ世トハ成ニケリ

と結ばれる。ここで必然的に討幕の戦いで功績の高かった一方の雄、新田義貞との対立が表面化してくるわけで、卷十四は、そのいきさつの叙述からはじめられる。

尊氏は時行の乱平定後「未ダ宣旨ヲモ不レ被レ下、押テ足利征夷将

軍」となりの、「新田ノ一族共拜領シタル東国ノ所領共ヲ、悉ク闕所ニ成シテ給人ヲゾ被レ付ケル」という挙に出る。これに対抗して義貞の側も「越後・上野・駿河・播磨ナドニ足利ノ一族共ノ知行ノ庄園ヲ押ヘテ、家人共ニゾ被レ行ケル」その結果「新田・足利中悪成テ、国々ノ確執無レ休時」という事態にたちいたるのである。「其根元ヲ尋ヌレバ」と、太平記も対立の要因を追求しているが、南北朝時代史は「尊氏の子義詮が僅に四才の幼年を以て義貞と共に鎌倉攻に加はりし事」に注目し、「義貞の鎌倉攻には義貞一味の軍勢と尊氏一味の軍勢とありしを推知すべし、是亦鎌倉攻の勲功を贏ち得んとする尊氏の策略に外ならず、後來両氏の相容れざる、既に已に此時に胚胎せりと謂ふべし」と述べている。太平記卷十は義貞の鎌倉攻の叙述であるが、そこには尊氏のこの意図にもとづく軍勢の参加についてはふれられていない。これも後世の史家の史料の分析によつてのみみいだされる政治的策略であり、軍記の描く行動の世界の背後にかくされている事実であつて、同時代の作者の眼の容易にとどきうる範囲をこえた裏面史であつたと云えよう。「其根元ヲ尋ヌレバ」という追求のなかで太平記が明らかにしたのは、義貞が倒幕の上で果した戦功によつて「東国ノ武士共ハ皆我下ヨリ可レ立ト被レ思ケル處ニ、尊氏卿ノ二男千寿王殿（義詮）三歳ニ成給シガ、軍散ジテ下野国ヨリ立帰テ大蔵ノ谷ニ御坐シケル。又尊氏卿都ニテ抽賞異レ他ナリト聞ヘテ、是ヲ輒ク上聞ニモ達シ、恩賞ニモ預ラント思ケレバ、東八箇国ノ兵共、心替リシテ、太半ハ千寿王殿ノ手ニゾ

付タリケル」という事態であった。ここにいたって武家の棟梁としての覇権をめぐる抗争であることが明確にされたわけである。

時行の乱を平定して鎌倉にとどまった尊氏に対して「隠謀ノ企」ありという判断がくだされ、やがて義貞が追討の宣旨をうけ東国に発向することになる。この間、尊氏・義貞、それぞれ、自らの立場を述べる奏状があり、それをめぐって朝廷における僉議もあつた。

また、尊氏の態度の叙述にも、太平記が尊氏をいかにとらえたかの問題を考察するてがかりのひとつがあるが、いまは省略したい。

こうして、以下足利勢と新田勢との戦闘の叙述にすすむのであるが、梅松論が足利方を御当家といい、御方とよんで新田方を敵としているのに対し、太平記の叙述の地の文は新田方を御方、あるいは官軍と称し、足利方を敵とするところからも、作者の立場はうかがえる。官軍に対して武家、聖主に対する逆臣、というとらえかたもみられるが基本的には「新田・足利ノ国ノ争ヒ」とする観点で戦況の展開を追っていくのである。建武二年十一月下旬、両軍は三河国矢矧^{ヤシヅ}で交戦し、新田勢は足利方を破って、進攻する。陣容をたてなおした足利方は、十二月中旬、箱根竹下で新田勢をむかえ撃ち、これを破って京に攻め上るのである。卷十五は、建武三年（太平記では二年としているが）正月の京とその周辺における両軍の激しい戦いを中心に叙述がすめられている。数次にわたる合戦で敗北を喫した足利勢は二月、九州をさして退去し、叡山に難を避けていた後醍醐天皇は京都に還幸あって、延元と改元されることになる。卷十六で

は、九州で菊池の軍を破って勢力を挽回した足利勢が大挙して東上し、正成は討死、義貞も敗れ、天皇はふたゝび山門に臨幸する。尊氏は光厳上皇をむかえて東寺を本拠とし、京都の制圧をはかろうとする。つづく卷十七は、ふたゝび京都を舞台とする戦いがくりかえされ、戦局は変転したが、官軍は遂に利あらず、後醍醐天皇は尊氏の要請をいれて都に還幸し、義貞は恒良親王を奉じて北国に落ち、金崎城にこもることになる。卷十八は、後醍醐天皇の吉野への脱出と、高師泰の軍の攻撃の前に金崎が落城した経過が叙述され、自害した尊良親王の御息所の哀話が語られている。卷十九で、金崎から遁れた義貞が軍勢をととのえてなおも足利方に抵抗し、一方、奥州に下っていた北畠顕家が大军をひきいて鎌倉に向い、足利勢と交戦、足利勢は屢破られたが、顕家は延元三年（建武五年）「五月二十二日和泉ノ堺安部野ニテ」高師直の軍に破れて討死した。卷二十にいたって、越前でなお作戦を展開する義貞勢を細川勢が藤島に攻め、潤七月二日、敗れてついに義貞は自害した。この八月に北朝も暦応と改元されるのであるが、ここに、鎌倉幕府滅亡以後の新たな対立・抗争もひとつの段階を画することになるのである。この後、卷二十一には、「天下時勢糺事」と題して義貞亡き後の歴史状況の概括があり、吉野における後醍醐天皇の崩御が叙述されて太平記第二部の世界は足利方に属していた武將の間の抗争を主として展開する第三部へとひきつがれることになる。高師直と塩治判官高貞とのトラブルは卷二十一に叙述されているが、すでに第三部の世界につ

ながる事件とみるべきであろう。現に前田家本ではこの一件は卷二十三で扱われているのである（国文第十一号 太平記欠巻考 鈴木登美恵）。

以上各巻の主軸となる事件を辿ってその経緯をみてきたのであるが、討幕に起った武士層の要求に逆行した建武の新政が崩れ、尊氏による新たな武家政権が確立するまでの過渡期としてこの期間を位置づけることができるであろう。いま、この経過のひとつま／＼を詳細に点検していく余裕はないので、建武初年の社会状況を追求する作者の立脚点がどこにあったかの問題を中心に検討をすゝめた

い。

元弘から建武へかけての施政の錯乱からくる社会の混乱ぶりについての太平記の叙述については、既にふれてきた。しかし、この状況をまったく具体的に、その諸現象の様相を今日に伝えているものは、建武年間記に載せる二条河原落書である。

此比都ニハヤル物 夜討強盜謀論旨

召人早馬虚騒動 生頸還俗自由出家

からはじまって、主として成上りの武士にたいする揶揄を中心に「自由狼籍の世界」の珍現象をつぎつぎとあばきたて、

天下一統メヅラシヤ 御代ニ生テサマ／＼ノ 事ヲミキクゾ不思
議トモ 京童ノロズサミ 十分一ヲモラスナリ

と結ぶ、長篇の諷刺詩ともいふべき作品である。

京鎌倉ヲコキマゼテ 一座ソロハヌエセ連哥 在々所々ノ歌連歌

点者ニナラヌ人ゾナキ
とか、

犬田楽ハ関東ノ ホロブル物ト云ナガラ 田楽ハナヲハヤルナリ
といった部分が、連歌史・芸能史の史料としてひかれることはあつても、この一篇を文学として検討した例をあまり聞かない。中村直勝「日本新文化史吉野時代」は「此の一联程痛快に時弊を指摘し、時代の創痍を抉剔したものはない。如何にも滑かな口調から吐き出される此の歌詞は、舌端鋭い火花を散らして展開されて行く。千古の巨匠が靈腕を振って成った大傑作のフィルムとは是れをこそ言ふのであらう。もし言を誇張して言ふならば此の時代の社会相は此の一首に盡きるとも言ひ得よう。或は此の一首で以て此の時代の文化相を最も完全に描き出したとも考へられよう」と述べている。これは史家の評であるが、独自の文学としての評価にたえうる作品として扱われてよいものであらう。

太平記にも屢落書はとりあげられ、京童とよばれる都市人の中の旺盛な批判精神をうかがうことができる。卷十四には

其比何カナル嗚呼ノ者カシタリケン、内裏ノ陽明門ノ扉ニ一首ノ
狂歌ヲゾ書タリケル

賢王ノ横言ニ成ル世ノ中ハ上ヲ下ヘゾ帰シタリケル
また、同じ卷十四で、

軍勢ノ心ヲ勇マセン為ニ「今度ノ合戦ニ於テ忠アラン者ニハ不日
ニ恩賞行ハルベシトシ壁書ヲ決断所ニ押サレタリ 是ヲ見テ其事

書ノ奥ニ例ノ落書ヲゾシタリケル

カク計タラサセ給フ論言ノ汗ノ如クニナドナカルランなど、その一例である。しかし、太平記の作者は、二条河原落書の筆者が自から京童の次元にたつてその「ロズサミ」を組織していったのに対し、個々の状況の説明に落書をかりただけであった。太平記の叙述そのものに、元弘―建武の歴史状況の核心にせまる追求があることは確かであり、そのいくつかの側面については既にふれてきたわけであるが、それは概観的な把握であつて、たとえば「所領一所ニ四五人ノ給主」の付いた「錯乱」がどのような葛藤をまきおこしたかの具体的な叙述へとすすむことはなかつた。討幕に参加した勢力は、それぞれの志向をもつていたことであらう。後醍醐天皇を中心とする宮廷貴族、乱の当初からこれに呼応して行動した武士層、新田・足利をはじめとして乱の過程で参加してきた勢力、など、それ／＼の思惑が、鎌倉滅亡のち元弘―建武の時点で対立し、討幕の本来の契機が破綻していく経過は、当事者から離れてこれをみれば、喜劇としてとらえることができよう。二条河原落書のとらえたものは、まさにこの喜劇的世界であつた。そこでは、政界の中枢に迫る摘発はみられないが、そこから波及した世相の種々相をとりあげこれをつらねることによって時代の典型的な様相を浮彫りにしたのである。

一方、太平記は、公家や武家の中央の立場ではなく、京童の視点にみられる傍観者の・第三者のそれでもない。藤房の諫言にみられ

るような儒教的で、しかし政界の中枢と直結してゐるのではない、これと批判的に対立しうる遁世知識人の場が作者の立脚点であつたと考えられよう。京童の世界を背後にもち、その声を汲みあげながらも、落書の主体と一体になつての時代の追求ではなかつた。そこに、建武新政破綻の要因を政治的課題の中心において把握しながら、それが社会状況としてどのような波紋をえがいていったかという現象面まで視野を拡大していかなかつた作者の立場があつたと思ふのである。

欲心熾盛——太平記の基底——

昭和二年に刊行された『綜合日本史大系』の一冊、「吉野朝史」の序文で、著者魚澄惣五郎氏は、次のように述べている。

吉野朝は恰も全国到る処、蜂の巣をつゝいた様な時代で、社会百般の事象は実に混乱錯雑を極めたのである。而もこれら大なり小なりの史実を提供してくれる幾多の史料は糸の纏れの様に纏綿して夥しく現時に伝へられてゐるので、これらの史料の解釈と批判とをなし遂げるだけでも容易の業でない。況んや同時代の史実の關係及び前後時代の史実との聯絡を辿つて時代精神を明かにし、事相の推移を巧に描き出すことは私の菲才到底その重荷に堪へ得べきではなかつた。云々。

魚澄惣五郎氏は中村直勝氏とともに龐大な史料を駆使してこの時

代の歴史を追究した歴史家であり、一面、時代の制約ともいえるその歴史観を別とすれば、田中義成氏の「南北朝時代史」とともにこの時代の把握に不可欠の業績を残している。太平記の検討にあたって、これらの史料にもとづいた時代の考察は、作品と史実の対比・検証のうえに極めて有効である。

南北朝時代の研究は、「蜂の巣をつゝいた様な」といわれる歴史的社会的「混乱錯雑」の根源を追究する方向ですすめられており、小学館の新しい「日本の歴史」の『南北朝内乱』を担当した佐藤和彦氏は叙述の方針を

内乱を公家と武家の対立とのみみるのではなく、農民や都市の民衆を含みこんだ変革期としてとらえること、この時代の特質を国人とか一揆とか悪党といった人々の行動のなかにさぐり、さらに民衆の生活まで踏みこんで描くこと、民衆の結合の状況、結合組織の問題を追求すること、

と、その月報のなかで語っている。国人、一揆、悪党、さらにその背後の民衆の動きが、この時代をゆすぶるエネルギーであり、その下からの力の噴出が「社会百般の事象」を複雑に混乱させるとともに、変革を推進させているのである。歴史家は、この社会の基層における変動の解明を中心に時代の全体像をとらえる志向を示しており、その視点は「太平記」の分析に及んで、「太平記の人間形象」にみられる黒田俊雄氏の見解が提出されたのである。「南北朝内乱」には、鎌倉期的なものとはっきり違ったものが、中心的に動いてい

た」として、それが「この時代に畿内を中心に顕著にみられる土豪・郷民らの新しい動き」であり、「内乱の主動力はあくまで足軽・野伏あるいは郷民としてあらわれる畿内地方を中心とする勢力」で、「新しい土豪・郷民あるいは足軽・野伏の軍は、正にその重要な特徴として『悪党的』であった」とする把握のうえにたって、「太平記がこの動乱を叙するにあたってえがき上げようとした主要なものは、この悪党的な人間像であった」とする主張がそれである。しかも、「悪党」が、単に素材として登場するのみならず、また更に悪党のもつ属性が無意識的に反映しているのでもない。悪党的人間は作者が意識的にとりあげた太平記の主要なモチーフである」と積極的に太平記における悪党的人間の意義を強調するとともに、太平記の叙述の進行に従ってこのモチーフは変転し、「一貫して『悪党的』人間をかきつづけるが、当初の変革的・反逆的モチーフが途中で見失われてしまうために、次第に構想は收拾がなくなり、退屈なマンネリズムに陥ってしまう」と批判して、結局のところ「太平記のような変革的・反逆的モチーフが本来戦記文学という叙事文学の形によって正しく発展させるかどうか」という問題に逢着して、「こういうモチーフは事件の展開そのものによって叙事的に表現される性質のものでなく、むしろ人間の『性格』の表現にかかるといえる性質のものである」り、「この『性格』に対応する形態」は伝記か劇であって「民衆は反逆的な『性格』を太平記の混乱をよそに、狂言によって成功的に表現し、そこに『おかしみ』という文学

の様式をつくり上げていた」と述べ、太平記がこの時代の基本的な課題を表現するには有効な文学形式ではなかったというところに到達するのである。この点は、のちの永積安明氏の「太平記論」の結末で「下剋上に象徴されるような、これらの新しい矛盾を、生き生きととらえるのは、「軍記もの」のような古い叙事詩的形式の、もはやなしうるところではなかった。内乱期における村むらの世界で、爆発しつつあった鋭い矛盾と対立とは、この時代の典型的情勢として、新しい文学の内容にもっともふさわしく、またその形式も、対立物の批判にとって、よりふさわしい劇的形式を、さしまねくことが必然であった」として、太平記が文学的に挫折したところから再出発した初期狂言の問題を提起する立場と、太平記の性格規定については異なるものの、一致した見解といえよう。それは、ジャンル論として興味ある問題を内包しているが、当面の課題ではない。

黒田氏の論文に対して、谷宏氏は「太平記の評価について」に於いて、「太平記の人間形象といながら、人間の形象といふことを評価の通路に入れないで、太平記のモチーフやテーマの新鮮さをそのまま太平記の新鮮さとしておし出そうとする危険」を指摘し、「歴史的価値をそのまま文学的価値とみてしまう」弱点として問題にしている。そして、ここで新たに提起した「歴史的大事件の詳細なルポルタージュ的文学」という規定については、永積氏の前掲論文の、注で「太平記がルポルタージュ的になったとすれば、現象に

追隨し、非文学的になったことでしかない」と批判された。その後、山崎正和氏は、「太平記からの発見」において、「太平記はもっとも意志的な主人公の登場する物語であり、行動の目的意識の明確な人間が描かれた文学」で「人間の意志とはなにかを追究する実験小説だと見ることができるといふ説を展開し、また「太平記は私的な人間の肖像面集であり、しかもその肖像を、歴史的なアナロジーによってひとつの型にまで高めようとした作品で」あるという、独自のとらえかたを提示した。さらに桜井好朗氏は、「古典としての太平記」で「意味体系」とよぶ概念を提示し、「太平記はその時代固有の意味体系の表現としての記録Ⅱ記念のはたらきを、多層的な表現構造の位相において開示」したものととして作品分析をすすめ、「下剋上」を表現構造そのものの姿としてとらえて「太平記から現実の悪党や民衆が下剋上の動きを示しているのをリアルに描写したところをひろい集めようとする一種の素材主義は、太平記という作品自体のもつ、このような下剋上の特徴を見のがしてしまおう」と述べている。

以上、研究史のなかから、当面の課題に必要な論点をとりあげて、一瞥してきたが、これらの多角的に提出されてきた問題の対立点は、論争というかたちでは止揚されていない。多様な見解が提示されたままで、批判はあっても、それに応えてさらに論の進展をみるということのないまま、今日に至っているのが現状である。これらの論考を前提として、また別の角度から太平記の性格の一面を、

南北朝時代の文学の問題の一環として考えてみたい。

太平記が、この動乱の時代の単なる報道的記録ではなく、ひとつの構造をもった作品である以上、そこには文学としての主題があるはずであり、現にこの作品を一貫しているものは、上層権力者間の覇権をめぐる抗争の帰趨を批判的に追求しようとする意図であって、それが太平記全篇の主題をなしているのである。正中、元弘の変から鎌倉幕府の倒壊、建武の新政までは後醍醐帝を中心とする宮方と北条氏の幕府勢力、新政の破綻から足利氏の武家方と、後醍醐帝の傘下の軍勢（官方）、そしてこの官方の有力な武将新田義貞の敗死と、中心の指導者後醍醐帝の崩御の後にはほぼ支配を確立した足利一門の武将の間の、観応擾乱などを主とする内訌と、それに乗じた南朝勢の動向、というように、抗争の推移を追う主題のもとに、構想が展開している。この追求は、基本的には太平の到来と理世安楽（流布本では、国）の政を庶幾する姿勢ですすめられるのであるが、現実には作者のその期待を裏切って、動乱は半世紀に及んでいつ果てるともなく続くのである。時代の矛盾の底深さと、変革の規模の大きさは、作者の思想の枠組を越えて、事態を進展させていき、巻頭の序に示された君臣論をもってしては、安危之所由を察することは不可能な現実が作者の前にくりひろげられていくのである。

動乱が複雑な様相を示しているのは、歴史的社会的基底から噴出してくるエネルギーに対応して、支配層間の抗争も激化することによるのであって、儒教的な軌範にもとづく君臣論による道義をいか

に鼓吹しても、この動きを制御することは望めず、既に有効性を喪失した思想に依拠して、作者はこの歴史的現実に対したのである。

新しい状況を把握しその進展を先取りする思想の創出への試みは見出せないにもかかわらず、その模索のあとは、雲景未来記事や北野参詣人政道雑談事などで語られている。が、作者は屢、既製の道義観で現実の事象をみ、慨歎しながら、その叙述をつづけるのである。その批判点のひとつである「欲心熾盛」という問題を対象として、太平記の叙述と作者の態度の関連を検討したい。もともとこの時代の人間を行動にかりたてたものは、階級のいかにかわからず、その動源は「欲心」であった。支配層の権力への意志も、国人・一揆・悪党の行動も、動乱による体制の亀裂のなかから抬頭する民衆の動きも、総じて生活の拡充を要求する「欲心」にもとづくのであり、「熾盛」という語に現わされているように、これが各分野でいっせいに燃えあがって「蜂の巣をつゝいた様な」状況を現出したのである。同じく欲心と言っても、その内実は階級の差によって大きなひらきがあり、頹廢的な様相を示すものと、歴史を推進するエネルギーともなる健康なものと、両極に分れるとともに、状況によっては複雑な発現のしかたを示す場合があって、一概にとらえることはできないはずである。しかし、太平記作者の眼は道義の頹廢からくる、批難さるべきもの、としてこの現象をみるのである。とくに厳しく指弾しているのは為政者の腐敗であり、北条高時や、新政成就後の千種頭中将忠頭、文観僧正、兵部卿親王（大塔宮）、南軍

に勝利した後の高師直らの行動である。

いにしへのひじりの御代の政をもわすれ、民の愁へ国のそこなはるゝをもしらず、よろづにきよらをつくして、いみじと思ひ、所せきさましたる人こそ、うたておもふところなく見ゆれ

(徒然草二段)

と兼好が批判する、その立場と軌を一にしている。

高時については「行跡甚々軽シテ人ノ睥ヲ不顧、政道正カラシテ民之弊ヲ不^ブ思、只日夜ニ逸遊ヲ事トシテ前列ヲ地下ニ辱シ、朝暮ニ奇物ヲ翫テ傾廢ヲ生前ニ致サントス」と述べ、流布本においては、これを「天地命を革むべき危機」の到来と位置づけている。

千種頭中将や文観僧正の奢侈ぶりも、権勢を笠に着たものとして批判され、兵部卿親王もまた「心ノマ、ニ修リヲキハメ、世ノソシリヲ忘テ、淫楽ヲノミ事ト」する有様で、公家一統の政道も「天下ノ人皆二度危フカラン事ヲ思」つたと叙述される。足利勢が制覇した後の高師直の行跡も「彌心ヲコリ、振舞思サマニナリテ、人ノ譏ヲモ顧ス、世ノ嘲ヲモ不^レ知事共多リケリ」として、その豪華な生活を暴露し、さらに「師泰カ悪行ヲ伝聞コソ不思議ナレ」と前置きし、暴虐の所行を鋭く追求していく、このように権力の座にある人物の非道な行為を批判しながら時代の推移を叙述していく視角は、太平記に一貫してみられるところであり、作者の態度の基軸をなしているものである。しかしこの批判は、権力者に向けられるばかりでなく、時代の一般的現象として、下層の武士(国人、悪党ら)や、

郷民の動きをも対象としていくのである。

徒然草一五五段に、「木の葉のおつるもまづ落ちてめぐむにあらず、下よりきざしつはるに堪へずして落つるなり。むかふる気、下にまうけたる故に、まちとるついで甚だはやし」という、兼好の思索の鋭さを示す一節がある。ここでは自然現象の移行が注目されているわけであるが、「下よりきざしつはる」力は、変革の時代の歴史的社会を動かす動源でもある。自然現象のようにあざやかなちでは現われないが、社会の基層から抬頭する力が社会構成の多層的な成員の体制・秩序をゆり動かし、新しい時代へと歴史を転換させていくのである。すでにみた黒田氏論文の指摘したように、土豪・郷民らの動きは、太平記の時代の主動力であって、作品世界の基底にその行動がとらえられていることは確かであり、本来、この動きが「下よりきざしつはる力」であった。しかし、太平記は、そのような力としてはこれを描いてはいないのである。

平家物語は巻五、富士川の章に「伊豆・駿河の人民・百姓等がいくさにおそれて、或は野にいり、山にかくれ、或は船にとりのつて海河にうかび……」と、戦禍をおそれて避難するさまが叙べられ、また、巻十、藤戸では武士の先陣の功名のために「浦の男」は犠牲になって、殺害されたことが語られている。平家物語の段階では、被害者でしかなかった「人民」が、太平記では積極的に戦乱の渦中に登場してくる。郷民・地下人・甲乙人、野伏・足軽・アフレ者、といった称呼で登場するものが、すべて人民と規定することはでき

ないにしても、階級構成でいえば下層に属するものであるとはいえない。これらの集団の活躍が、太平記の地をなしているといっても過言ではない。しかし、太平記の作者は、この集団の行動の意義を認めて、深い興味と関心を示し、前面にたてて叙述していることとはしていない。「儀ヲ重クスル物ハ少ク、利ニ趨ル者ハ多」い「世之末ノ風俗」に批判的な作者の眼には、「欲心熾盛」の集団の動きは否定的にしか映らないのである。

めさきの物欲は頹廢につらなるものであり太平記の作者がとらえる基底の階層の動向には多分にその傾向があることは事実であるが、その根底にある解放への欲求を、充分つかみだすことはできなかった。

卑賤の立場に徹して、そこからこの時代の動乱の真相を追求するのではなく、専ら、名匠の視点で太平記の世界を叙述した、その矛盾がここにあるといえるのではないか。

これは太平記の、基本的ではあるが、その一面であって、具体的な叙述によって示される作品世界は多様な問題をはらんでいることはいうまでもない。

附記

「建武年間における太平記」は、一九七二年秋、福岡で行われた中世文学会における発表、「欲心熾盛——太平記の基底」は一九七七年春東京における中世文学会のシンポジウム「太平記とその時代の文学」で報告した原稿である。後者は時間の制約があってその前半しか話せなかった。書き

改める予定でいたが、その余裕を得ないので、当時の原稿のまま、発表することになった。